

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(小学校用)

都道府県名	愛媛県
-------	-----

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	松山市立姫山小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	4	4	4	3	3	4	1	23	30
児童数	127	124	124	104	105	123	5	712	

研究の概要

1. 研究主題

一人一人がよさを発揮し、主体的に学ぶ子どもの育成 - 算数科の実践を通して -
--

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

全学年・算数 学習内容に系統性が高く、基礎・基本の積み重ねが重視されるため。 また、子どもの理解度に差が出やすい教科であるため。
--

(2) 年次ごとの計画

平成14年度	<p>テーマ 「一人一人がよさを発揮し、主体的に学ぶ子どもの育成」 研究の見通し(仮説)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 子ども一人一人の実態を踏まえ、個に応じたきめ細かな指導を充実すれば、分かる喜びを味わい、基礎・基本の確実な定着を図ることができるであろう。 ○ 算数的な活動を取り入れた自力解決の場と時間を確保し、各自の自力解決について情報交換したり、学び合ったりする場を充実すれば、一人一人のよさに学ぶことができ、考える力を身に付けさせることができるであろう。 <p>研究の内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 研究主題の設定と研究推進計画の立案 ○ 算数科を中心とした研究実践 <ul style="list-style-type: none"> ・ 実態把握(アンケート、学力調査) ・ 学習指導過程の在り方の研究(学習指導過程に現れる子どもの姿) ・ 問題解決的な学習態度の育成(算数的活動を取り入れた自力解決、ノート指導) ・ 個に応じた指導のための指導方法や指導体制の工夫(少人数指導、チームティーチング、繰り返し指導) ○ 平成14年度の研究成果と次年度への課題
--------	---

	<p>テーマ 「一人一人がよさを発揮し、主体的に学ぶ子どもの育成」 - 算数科の実践を通して -</p> <p>研究の見通し</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 子ども一人一人の実態を踏まえ、個に応じたきめ細かな指導を充実すれば、分かる喜びを味わい、基礎・基本の確実な定着を図ることができるであろう。 ○ 算数的な活動を取り入れた自力解決の場と時間を確保し、各自の自力解決について情報交換したり、学び合ったりする場を充実すれば、一人一人のよさに学ぶことができ、考える力を身に付けさせることができるであろう。
--	--

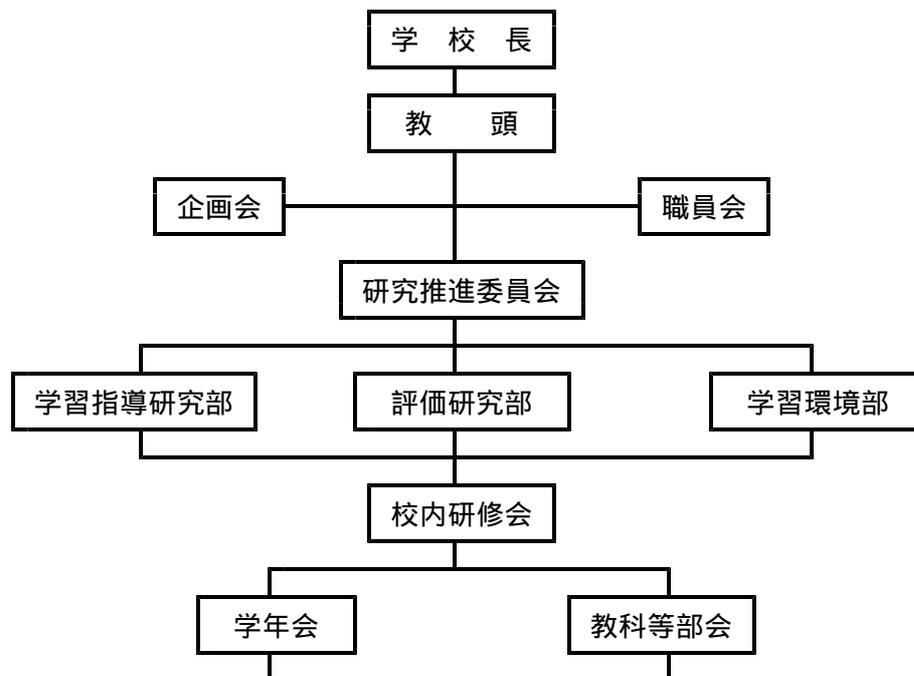
平成15年度	<ul style="list-style-type: none"> ○ 評価規準・評価方法を明確にし、子どもの学習状況を見とり、適切な支援をすれば主体的に学ぶ子どもを育てることができるであろう。 研究の内容・方法 ○ 研究仮説、研究内容と方法の検討 ○ 算数科を中心とした研究実践 <ul style="list-style-type: none"> ア 個に応じたきめ細かな指導 <ul style="list-style-type: none"> (ア) 指導体制の工夫(少人数指導・学習アシスタント) (イ) 問題解決能力を伸ばすための指導の工夫 (ウ) 授業改善(効果的な支援計画・教科書比較) (エ) 集団解決の場の充実 イ 指導と評価の一体化 <ul style="list-style-type: none"> (ア) 評価規準・評価方法の明確化 (イ) 自己評価・他者評価の重視(学習感想) ウ 各学年に共通する基本的な内容や環境の充実 <ul style="list-style-type: none"> (ア) 「朝の自主学習」の充実 (イ) 基本的学習習慣の徹底 (ウ) 学習環境の整備、充実(算数コーナーなど) ○ 平成15年度の研究成果と次年度への課題
--------	---

平成16年度	<p>テーマ 「一人一人がよさを発揮し、主体的に学ぶ子どもの育成」 - 算数科の実践を通して -</p> <p>研究の見通し</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 子ども一人一人の実態を踏まえ、個に応じたきめ細かな指導を充実すれば、分かる喜びを味わい、基礎・基本の確実な定着を図ることができるであろう。 ○ 算数的な活動を取り入れた自力解決の場と時間を確保し、各自の自力解決について情報交換したり、学び合ったりする場を充実すれば、一人一人のよさに学ぶことができ、考える力を身に付けさせることができるであろう。 ○ 評価規準・評価方法を明確にし、子どもの学習状況を見とり、適切な支援をすれば主体的に学ぶ子どもを育てることができるであろう。 研究の内容・方法 ○ 研究仮説、研究内容と方法の検討 ○ 算数科を中心とした研究実践と各教科等の関連の研究 <ul style="list-style-type: none"> ア 個に応じたきめ細かな指導 <ul style="list-style-type: none"> (ア) 指導体制の工夫(少人数指導・学習アシスタント) (イ) 問題解決能力を伸ばすための指導の工夫 (ウ) 授業改善(効果的な支援計画・教科書比較) (エ) 集団解決の場の充実 イ 指導と評価の一体化 <ul style="list-style-type: none"> (ア) 評価規準・評価方法の明確化 (イ) 自己評価・他者評価の重視(学習感想) ウ 各学年に共通する基本的な内容や環境の充実 <ul style="list-style-type: none"> (ア) 「朝の自主学習」の充実 (イ) 基本的学習習慣の徹底 (ウ) 学習環境の整備、充実(算数コーナーなど) ○ 平成16年度の研究成果と次年度への課題
--------	--

(3) 研究推進体制

<p>研究組織の基本構想</p> <p>実践研究の中心を「学習指導研究部」「評価研究部」「学習環境部」の3部を置き全校体制で仮説の検証及び修正・創造に取り組む。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学習指導研究部 授業づくりを中心に研究する。 ・ 評価研究部 個の学びに生きる評価の研究を行う。 ・ 学習環境部 子どもを育てるための学習環境の充実と改善の研究を行う。 ・ 学年会 学年に応じてテーマを設定し、子どもの実態に基づいた生きた研究が蓄積できるようにする。

- ・ 教科等部会
各教科等の専門的な研究と行事等の企画・立案を行う。各学年の実践研究を集約したり、広げたりする。
- ・ 研究推進委員会
研究実践を推進・調整していくために、計画的に研究の方向性を提案し、成果や課題をまとめる。
昨年度からの改善点
- ・ 実践研究の中心を学年部から3部会制に変更し、本校の研究内容の3本柱に対応した研究組織とした。



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

ア 個に応じたきめ細かな指導

(ア) 指導体制の工夫

3～6年生の算数科の授業において、子どもの希望により、学級を2つのコースに分け、習熟度別学習を行った。

「基本コース」では、繰り返し学習や算数的活動を多く取り入れ、基礎・基本を確実に身に付けさせ、分かる喜びを味わわせること、「発展コース」では、自力解決や練り合いの場を大切にし、発展的な学習にもチャレンジし問題解決能力を伸ばすことをねらって指導を進めてきた。子どもたちは算数の学習が「楽しくなった。」「分かるようになった。」などの肯定的な反応を示した。(平成15年12月実施の「算数アンケート」より)

特に、「基本コース」の子どもたちのなかには「分かるようになって、おもしろい。」とか「算数の勉強が楽しい。」と、目を輝かせながら自信に満ちた顔で話す子どもが増えてきた。

2学級3Tの授業では、「基本コース」を2人の教師で子どもの理解度に応じて細かくかかわることができた。また、「発展コース」は、発表する子どもが固定しがちであったが、2クラス合同だったので、お互いにより刺激になり、高め合うことができた。

1、2年生では、学習アシスタントによる個別指導のサポートを行ってきた。一人一人のつまずきや疑問に早く適切に対応し、効果的な支援ができた。また、授業のなかで教師と学習アシスタントの役割分担を明確にしたことで、見落としがちな子どもの小さな反応などがよく分かるようになった。

(イ) 問題解決能力を伸ばすための指導の工夫

子ども自身が選ぶことのできる弾力的な単元構成を工夫することで、子

どもの課題意識が高まった。また、子どもが自分のペースでじっくりと課題に取り組む時間を十分保障することができ、自力解決の場の充実を図ることができた。

- (ウ) 授業改善
自力解決の進みにくい子どもについては、助言とともにヒントカードを用意しておいた。これは、解決の手がかりとしてとても役立った。
教科書比較をすることで、単元の導入段階等で子どもの実態に合った教材を取り入れることができた。

- (I) 集団解決の場の充実
情報交換の場を設定することで、自分と違う考え方のよさに気付いたりお互いの考えを練り合い高め合う楽しさを味わったりすることができ、主体的な学習を展開することができた。
グループの話合いの回数が増えるにつれて、上手に自分の考えを説明したり意見交換をしたりすることができるようになってきた。また、自分の考えを納得してもらったときや友達の意見から新たな考えが浮かんだりしたときなど、友達とのコミュニケーションの中から学ぶ楽しさを見出していた。

- イ 指導と評価の一体化
ノートに課題や自力解決の過程、学習感想を書くことを指導してきた。学習感想を書くことで、子どもは学習を振り返り、自己評価や他者評価をすることができた。また、教師は子どもの意欲、学習状況などを把握し、指導に生かすことができた。

授業に入る前に、レディネステストで児童の実態を把握した。そして、その情報をもとに支援表をつくり、個に応じた指導や評価に役立てた。

学習アシスタントとの連携をスムーズに図るために、連絡ノートを活用した。学級担任が見取れなかった子どもの様子や変容を細かく知ることができた。更に、学年で1冊の連絡ノートを活用しているため、他のクラスの子どもの様子が分かるだけではなく、教材や授業の展開についての話題もあり授業改善にも役立っている。

- ウ 各学年に共通する基本的な内容や環境の充実
「朝の学習の時間」に読書や算数プリント、漢字テストなどの自主学習を行っている。ほとんどの子どもが落ち着いて学習に取り組んでいる。特に、算数プリントは、繰り返し活用できるように各学年スペースのプリント棚に整理されていて、レディネステストや家庭学習としても活用でき、いつでもだれでも使えるようにしている。

「朝の学習に関するアンケート」(平成15年12月実施)の結果からも全校的に朝の学習を楽しんでいる子どもが多く、主体的に取り組んでいる子どもが増えてきたことが分かる。内容を精選し、無理なく継続してきたことで、子どもの意識や生活の中に「朝の学習の時間」が定着してきたように思われる。

「算数コーナー」によく書けている学習感想や工夫して問題を解いているノートを掲示することによって、友達の感想や考え方を参考にする姿も見られ、学習の中で有効に活用することができた。

2. 今後の課題

- ア 個に応じたきめ細かな指導
じっくりと進む「基本コース」でも、数名の者がまだ授業に着いて来れず自信を付けることができなかったという昨年度の課題より、2学級3Tの授業で「基本コース」を2人の教師で指導した。しかし、教師間の連絡調整のための時間確保や2Tの役割、2学級の時間割設定等で難しさを感じた。週時程や日課表そのものの弾力的な運用と見直しが必要であろう。

これからも「発展コース」における発展的な学習の研究や開発を行う必要がある。

自分の考えを分かりやすく伝えること、友達と比べ互いのよさに気付き、よりよい解決方法を導くことなどの表現能力は十分ではない。国語科や他の教科等でも表現力の育成に力を入れる必要がある。

情報交換の際に、ノートには自分の考えが書けているのに、自身がなかったり上手に説明できないと思ったりして発言することを嫌う児童が高学年に多い。励ますためのノートへの支援や、説明方法のパターン化などの工夫が必要である。

- イ 指導と評価の一体化
算数アンケート(平成15年12月実施、全校児童対象)によると、80%以上の子どもたちが算数の学習を楽しんでいると感じていて、主に「問題が解けた

とき「教具を使うとき」に楽しいという感想が多い。このことから、これからも効果的な算数的活動を様々な場面で取り入れていくことが必要である。

算数アンケートより、高学年の子どもに、問題解決できたこと自体に満足し別の方法を考えたり難しい問題を解いてみようとしたりする意識の高まりが見られない傾向があることが分かる。そこで、授業後の学習感想に、「なぜ解けなかったのか」「どこが難しいと感じたのか」など、自分の学習を客観的に振り返って書かせていくことから始めたい。

単元テストの観点別分析の結果、「数学的な考え方」の観点については、どの学年も他の2観点に比べて正解率がかなり低くなっている。また、「基本コース」の「表現・処理」の観点も低かった。これらの結果を参考にして来年度どのような研究をすればよいのかを探っていきたい。

指導と評価の一体化が図れるような評価方法を、引き続き検討する必要がある。

ウ 各学年に共通する基本的な内容や環境の充実

日常の生徒指導の徹底（基本的生活習慣の形成とけじめのある生活態度の育成）と聞く力の育成について、教師間で共通理解を深め、一体となった指導を進めてきたが、目に見える成果としては表れていない。これからも引き続き系統立った指導が必要である。

子どもたちの学習環境は学校だけではなく家庭や地域にも及ぶことから、学校での取組を保護者や地域の方々に発信できるような体制づくりと学習環境整備を進めていきたい。

エ おわりに

少人数指導は、一人一人の活動やつまずきなどに対して十分に支援することができるので大変有効であった。また、子どもは教師とかかわりをもちたい、認められたい、という願いをもっている。一人一人の子どもとの十分な触れ合いは、児童の心の安定にもつながる。安心して学習できると、それは自分の力を存分に発揮できるための確かな学力の向上につながってくると考える。

今後も、問題解決能力を伸ばすための指導の工夫や集団思考の場の充実を図りながら、子どもたちとしっかりかかわりをもった支援を心掛けていきたい。

学力等把握のための学校としての取組

単元テストの観点別比較(各单元ごと、3～6年生)
学力診断テストの実施(2月)
子どもの意識調査(12月、全校児童)

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

学力向上フロンティア事業研究指定校公開授業

- ・ 日時 平成15年1月30日
- ・ 場所 松山市立姫山小学校
- ・ テーマ 「一人一人がよさを発揮し、主体的に学ぶ子どもの育成」
- 算数科の実践を通して -
- ・ 対象 松山教育事務所管内各小中学校教員、保護者

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 6学級以下 7～12学級
 13～18学級 19～24学級
 25学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
 一部教科担任制 その他
- 【研究教科】 国語 社会 算数 理科
 生活 音楽 図画工作 家庭
 体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無